

とっつきにくかった周産期病理を あらためて学ぶ

—診断から説明までを徹底整理

企画者のことば：周産期病理を臨床に活かす一次なる一手への架け橋として

小谷友美

周産期医療の現場は、一分一秒を争う超急性期の対応や、刻々と変化する母児の動態管理など、常に高い緊張感が求められる世界です。このような環境下において、分娩や妊娠終了後に届く「病理診断」の結果が、直ちにその場の治療選択を左右する場面はそれほど多くありません。また、提出された病理レポートの専門的な記載内容を十分に咀嚼し、悲嘆や不安を抱える患者さんに対してわかりやすく説明することに、難しさを感じている産婦人科医も少なくないのが現状ではないでしょうか。多忙な日常診療のなかで、胎盤病理はどうしても「提出して終わり」にされがちです。

しかし、目の前の妊娠転帰について、そのときに行われた管理や介入も含めて病理組織学的エビデンスに基づき検証することは、決して過去の振り返りだけにとどまりません。それは、次回妊娠における異常の早期発見や再発予防の戦略を立てる礎となり、さらには、類似の経過をたどるほかの妊婦さんにより質の高い、最善の診療を提供する確かな指針となります。病理診断は、過ぎ去った事象の答え合わせではなく、次の命を守るための「未来への懸け橋」となります。

そこで本特集では、わが国の周産期病理を牽引するエキスパートの先生方に、われわれ産婦人科医が日常臨床において確実に押さえておくべき重要ポイントを明快に整理していただきました。疾患の成り立ちから、レポートの読み解き方まで、明日からの臨床に直結する知見が凝縮されています。

本特集を通じて、全国の産婦人科医の先生方が、分娩室での胎盤の肉眼的所見を含む病理所見にあらためて関心をもち、その理解を深めていただけることを願っております。そして、単にレポートを受け取るだけでなく、臨床への確かなフィードバックとより深い病態解明を目指し、病理医の先生方と活発にディスカッションを交わすための共通言語として、本特集が有意義な一助となれば幸いです。